



訃報

矢嶋嶺先生を偲ぶ

7月5日、矢嶋嶺医師が逝去されました。享年82歳。

オムツ外し学会などでのコミカルな語り口がなつかしく思い出されますが、その内容は一貫して医療至上主義批判という過激なものでした。本誌に長く連載していただいた「老いのミカタ」でもその姿勢は変わりませんでした。ただ、連載に綴られた日々の診療風景には、介護職への強い期待と愛がよりあふれていたように思います。

地域医療の先駆者として長野県武石村（現上田市）を中心に活躍された先生は、クラシック音楽、映画、本、そして女性をこよなく愛するとても豊かな人でもありました。

どんどん暗くなるこの社会状況だからこそ、先生の歯に衣着せぬ発言が必要だったのに……と残念でなりません。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

編集部一同



お別れの会。会場入り口には、先生の白衣と聴診器、スリッパが置かれました



「オムツ外し学会」でのなつかしい1枚

男のロマンに生きてきた矢嶋さん

長野県・北山診療所 佐々木学



私が初めて長野県の田舎の診療所で働き始めたとき、「在宅医療」なる形で診療を行っている村の診療所が、3か所あった。泰阜村、小川村、武石村である。それぞれが、個性的で元氣一杯だった。

その診療所の医者たちは毎年何回か集まり議論を重ね、実践を通してまた議論をして、酒を酌み交わした。カラオケには見向きもしないで、午前2時頃まで、毎回議論ばかりするヘンなおじさんたちだった。共通項は年寄りたちの生活を最期まで自宅で支えてあげたい。そのために医療は出しゃばらずに抑制し

て、福祉を充実させて、いい思い出とともに看取ってあげたいということに尽きた。

そのヘンなおじさんたちの年長者として存在したのが、矢嶋嶺さんだった。武石村にあった矢嶋さんの診療所はよきスタッフと理解ある村長に恵まれて、順風満帆に見えた。しかし、矢嶋さんも人の子、悩みは多かった。私が初めて会った頃は、老人は自宅で死ぬのがよいと言っていたが、いつしか死に場所は関係ないと言ようになって、目を白黒させられた。最近はまだ、やはり自然に自宅で最期を迎えさせてあげたいものだと言うようになった。私も在宅原理主義者であるが、一時期、病院で死ぬ老人が増えて悩んだ。結局2年間総合病院で研修し、自信を取り戻し田舎の診療所に戻ったという経緯があり、彼とやると本物の「同志」になれたような気分だった。

田舎で住民の信頼感を得るのはむずかしい。彼は武石村診療所の近くに自宅を建てたことで、やっと村民として扱ってもらえそうだと言っていた。私は「所詮、われわれはよ

そ者、10年が一つの区切りでしよう」と主張していた不明を恥じた。さらに、彼は15年たつて武石村に自分の墓を建てた。これによって、村人の態度がガラッと変わったそうだった。この話は在宅信奉者の心を貫いた。私たちは甘かった。

矢嶋さんはエライ！ 本物の地域住民になることの光と影を、彼は自分の体験を通してわれわれに教えてくれた。私たちが住民の一員になって医療という生活の一面面を役割分担させていたばかりの意味をもう一段深く考えさせてくれた。自分がその墓に入り、自分の子や孫の代になって初めて本物の「地域医療」ができるのかもしれない。医師の技能化、プロフェッショナル化を批判するだけの私たちへの批判だったのかもしれない。

25年前、私たちは「地域医療とは男のロマンと女のガマンだ」と氣勢を上げていた。彼があれだけ縦横に活躍できた陰には奥さんの力が与ってないはずはあるまい。死ぬときすらそうで、後のことはよろしく頼むとばかりに、あっさりとして逝ってしまった。こんな身勝手な男はもういない。私の世代は妻に頭を下げっぱなしである。下の世代は妻がダメと言えダメのようである。

男のロマンに生きてきた矢嶋さん、あなたの人生はよかったですよ。おやすみなさい。

夢で会った矢嶋先生が言うことに……

長野県・ライフケア信州 中井孝幸

矢嶋嶺先生は、いい意味で「医者らしくない人」であった。

それは、育ってきた過酷な環境によるところが大きい。詳細は先生の著書に譲るが、そんな先生が、突然、逝ってしまった。

6月15日 先生は一人で車を運転していて、左カーブを曲がりきれず右ガードレールに接触、車は回転して対向車に当たった。救急隊が到着したときは心肺停止状態、その後ドクターヘリで信州大学病院に搬送された。事故原因は今も不明である。

僕たちは一週間後、高度救命救急室で面会した。今にも目を開けそうな先生に「こんなところで寝ている場合じゃないですよ。患者さんが待ってますよ！」と診療所の看護師が声をかけた。私も話しかけたいと思ったが、出てきたのは涙だった。人工呼吸器を付けていても点滴のみの消極的延命は「これが最後」と悟るのに十分であり、先生が望む「尊厳を保ったまま死ぬ」現実がそこにあった。

診療所の職員皆が奇跡を願ったが、それは

叶わず7月5日未明、先生は旅立ってしまった。6日朝、私の前に先生が現れた。

……「のどが渴いた」とある飲料を欲し、それを飲んでひと息ついた先生に私は聞いてみた。「あのときの僕たちの声は聞こえましたか?」。先生は「全部聞こえた」さらに「人の心も伝わってきた」と。他にもいろいろ話した……。

昼過ぎ、先生が欲した飲料を持って最後のお別れにご自宅へ伺った。矢嶋家の人々に夢のことは信じてもらえず、しかし、持参した飲料には家人のみが知る理由があり、私は夢に出てきたのは先生本人だと確信した。

「罪なやつ」これは矢嶋夫人の言葉である。

事故当日は、勤務先の老健に向かう途中だった。先生の診察を待っている人がたくさんいたのだ。医療・介護にとどまらず、教育や趣味のオーデオの世界まで、先生を慕っている人がいたのに、あっけなく逝ってしまったことは「罪」かもしれない。「死生観」についての詳細も先生の著書に譲るが、先生



つきあいは長いのに一緒に写った写真は驚くほど少ない。せつかくのこの写真も先生が目をつむっていて、ああ……

は常々「自分はどのように死んでもかまわないが、私を知っている人にとって後味の悪い死に方はしたくない」「死にゆく人が与えたものを、網膜と心に焼き付け（中略）それこそ死者はその後も人々の心に生き残ることができる」と語っていた。

無神論者だった先生が「死んだら土に還るだけ」と言っていたことを思い出すと、あの日の確信は揺らいでくる。その考えが正しければ、先生の魂はもうこの世にないのだ。

それでも、僕はまた先生が夢の中に出てくることを信じている。出てきたら意地悪な質問のひとつもしてやりたいものである。

権力的でない生き方

三好春樹

介護の世界に大きな影響を与えている医師はたくさんいる。しかし介護職に人気のある医師といえば矢嶋嶺先生だろう。なにしろ、介護関係者による「矢嶋先生を囲む会」が、毎年定例化していたくらいだ。その会を当人たちは「くを囲む美女の会」と呼んでいて、私はオブザーバー参加。軽井沢、上高地、蓼科で先生と一緒した。

先生は医師で、私は介護職出身の一介のPT。さらに17歳も年下だ。にもかかわらず、先生を「友だち」と言いたくなる（失礼！）くらい自然体でなんでも話ができるのだ。だから「美女」たちも各地から集まってきたのだろう。

その魅力の秘密は、先生の人柄以上に思想性にこそあると私は思っている。先生は「反権力」の人だった。といっても「反権力という権力」に転じてしまうような、硬直した「反権力」ではない。

原発や安保法制を推進する安倍政権を痛烈に批判されていた。でも、権力はそうした外部にあるだけでなく、内部にもあるという

ことをよく知っておられたと思う。つまり、自分自身が権力的にふるまっていないか、権力的な表現をしてはいないかをまず点検することこそ、本当に権力を無化することだと考えていて、なによりそれを実践しておられた。

私たちが知っているのは、食事をしたり、一緒に露天風呂に入りながら、楽しそうに音楽や本の話、ときには、サラッと下ネタをされる姿だ。おそらく、地域の多くの患者さんたちにも、そうした、決して権力的にならない関わり方をしてこられたに違いない。そうでなければ、先生の「お別れ会」にあんなに大勢の住民が参列するはずがない。

先生は近親者を亡くされて間がなかった。それでも「いつまでも引きずるつもりはない。これからも皆さんと一緒に旨い酒を飲みたい」と言っておられた。

だから、私は先生の遺志を継いで、安倍内閣に抵抗し、残った者たちで先生を話題にして旨い酒を飲もうと思う。



「矢嶋先生を囲む美女たちの会」より。夕食の場だけでは飽き足らず、ホテルの部屋に集まって飲み明かした